

3-4. 被害記録による首都圏の歴史地震の調査研究 安政江戸地震（1855）による江戸市中の町別死者数

都司嘉宣

安政江戸地震は幕末期の安政2年(1855)10月2日、関東地方南部に起きた、首都圏直下の地震の一つで、当時の江戸市中に関東震災(1923)や元禄地震(1703)に匹敵する重大被害を生じた。当時、江戸は、市中の総面積の70%が大名・旗本の屋敷地や寺社の敷地で占められ、一般の町人の住む町の面積は約30%にしかすぎなかった。当時、江戸の日本橋の近くに住んでいたと見られる城東山人は、この地震の直後に「破窓の記」という文章を残した。この文には、江戸の町人町のうち、安政江戸地震によって死者を生じた473個の町名と、そこで死んだ人の人数が刻銘に記されている。「町方横死人の数は、さる掛りの者より書出しの写を借得しの儘、後証の為として左に載ぬ」と説明されているので、「さる掛りの者」とあるので、公的な立場にある人のもとで集計されたりリストを筆写した記録であると考えられる。この文献には、江戸城から見て東西南北の4方向で被害に分類してあって、「東の方は210町、死者合計2,133人、西の方は32町、死者合計80人、南の方は46町、死者合計141人、北の方は184町および新吉原内名前不明者444人で、死者合計2,272人」と書かれ、この4方向の町々を合わせた、江戸市中の町人町での死者の合計は4,626人と記されている。

いっぽう、幕末の江戸期には尾張屋清七という地図製作の版元が「嘉永・慶応 江戸切絵図」を刊行した。この切り絵図は人文社による、復刻版は発行されている。これは幕末期の江戸の市街地の詳細地図であって、当時の江戸の大名・旗本屋敷、寺院神社の配置がほぼもれなく記載されており、さらに町人地については町名がびっしり書き込まれている。「破窓の記」に載せられた安政江戸地震で地震で死者の出た473個の町名を、この「切り絵図」の上を探し出すことができれば、「切り絵図」の上のどの位置で死者が出たのかが判明する。さらに、幕末の各町域が現在の地図の、どの範囲を占めるのかが判明すれば、現在の地図の上で、死者の分布図を書くことができるはずである。しかしながら、この一つ一つの作業は、実際にやってみると、あちこちにつまずきがあった。まず、「切り絵図」のうえに「破窓の記」に挙げられた町名が見つからないが15%ぐらいあり、けっきょく全部で473の町名のうち、所在・広がり判明したのは402個の町名にとどまった。さらに、幕末から現代に至る、区画整理、道路の拡幅などで、幕末の地図と現在の市街地が対応しないことが多いのである。それでも、寺院神社の位置はほぼ変わらないためこれを手がかりとして、なんとか、幕末の町別の死者の分布を、現代の地図に描きだすことができた。

